

## IV. 学校現場の問題

### 現職教師が大学院で学ぶことの意義と現状

山形県村山市立楯岡小学校 小室 哲 範

#### 1. はじめに

1971年6月11日の中央教育審議会の「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」の答申などに基づいて、現在現職教師の再教育を主眼とする兵庫、上越、鳴門の各教育大学が設置されている。さきの答申以来、これらの大学の役割やそのあり方等について、各識者がマスコミ・書籍・研究論文などでとりあげ、意見を発表していることは周知のとおりである。

さて、1985年12月4日付の朝日新聞は「現場に帰って、すぐ役立つことは何もなく。生活のペースを戻すのが一苦労だった」とする上越教育大学（以下、本学と称す）大学院修了者（現職教師）の感想を載せている。筆者は、現在このような大学院に在学中の身であり、各識者や本学の先輩のように、本学のことや本学での経験を必ずしも客観的に述べ得る立場にはない。しかし、現在学んでいる身であるからこそ述べ得ることもあるのではないかと考える。そこで、現在考えている本学大学院で現職教師が学ぶことの意義、その生活の現状について述べてみたい。

#### 2. 本学で学ぶことの意義—自己理解の場としての大学院

##### (1) 飛躍の契機を求めて

現在大学院で学んでいる現職教師の入学動機は、実に多種多様である。個人にあっても、単一の動機だけで大学院で学んでいるのではない。この動機について、本学で学ぶ友人との会話の中から、ほぼ共通なものとして次のようなものがあることに気づかされた。

現職教師として10年も過ぎると、自らの教育実践について同僚教師からそれ程ひどい批判を受けることもなくなり、同僚に指導上意見を求められたり、学校外でも自分の意見を述べたりする機会が増えてきていた。そして、このような機会が増えれば増えるほど、次のようなことについても自覚するようになってきた。それは、同僚などに助言を求められたとき、言っている内容が以前に別の人物にしたのと同じ内容の繰り返しであったり、教育実践においてそれまで身につけてきた手法の単なる繰り返しでしかない、といったことがらである。たしかに、後輩教師が具体的事項（例えば板書事項）についてアドバイスを求められれば、私が見た例ではこんなすばらしいものがあった、と一応相手が納得する程度の対応はできる。しかし、その内容が何故すばらしいのか、といった理論的根拠まで説明することは往々にして困難であった。

こうした状態を自覚する教師の場合、自分の学校の同僚の批判に耐えるだけの教育実践ばかりか、自分が向上したと実感できる指導技術の向上と、自己の指導理論の確立を目指すのは自然である。本学に入学する以前の仲間は、このような飛躍の契機を求めており、それを本学に求めたものと考えることができる。

## (2) 師の存在と、自己の能力の把握

それでは何故このような契機が職場での研修や、各都道府県教育委員会などが主催する研修ではなく、大学院でなければならなかったのであろうか。大学院で学ぶことの、第一の意義は、自らの指導上の師を広く求めることができるということがあげられよう。各地で行われている研修会では、いくら素晴らしい講師が指導してくれたとしても、その場限りのことが多い。職場においても優れた同僚も少なくないが、日々の仕事に忙殺されじっくり話し合う機会がなかなか得られず、また同僚としての遠慮もある。ところが、本学大学院においては、常時 150 人余の教官がおり、自分の興味・関心の内容やそれに近い事項を生涯かけて研究をしている。この人的資源こそ他にないものといえる。自らの師として、それが文献であっても、記録に残された優れた実践であっても、もちろんよい。ただ、このような師の問題点として、それ自身の弱点を積極的にさらけ出してはくれないことが挙げられる。つまり、読み取る側がひたすら悟らなければならない。一方、自分の目の前にいて生きた対応をしてくれる師を前にすると、自分をさらけださざるを得ないし、師は自分の長所は当然としても短所ないし欠点までさらけ出してくれるものである。このことから、いままで自分としては認めたくなかった自身の弱点まで認めざるを得なくなる。例えば、体育の授業について、現在「楽しい体育」の必要性が叫ばれ、その方法上の解説書が多く出されている。学校現場では、この種の書籍を読むときは、まず授業の解説部分に力点を置いて読む。そしておそらくは、そう批判の出ない授業を行えることになる。そうすれば、一応自分は教師として通用する、との感じを持つことができる。(言うまでもないことであるが、ここまでの段階に至ること自体が相当困難ではあるのだが。)しかし、この「楽しい体育」が叫ばれるようになってきた歴史的背景、社会状況、各種答申との関係、これまでの学習指導要領との力点の違いなどについて、仮に解説書に書かれていたとしても読まないか、読み流すことが通例である。こうした状況におり、大学院での授業等に出席しその歴史的背景等を知り、改めて「楽しい体育」の重要性を再認識するのである。このときに、はじめて自己の実践上の弱点を発見したり、あるいは実践上の弱点発見の確かな目を養うことができると考えるのである。こうした目は、通常短期間での研修では養い得ないものであろう。つまり、大学院で学ぶことの意義は、自分の現在抱えている実践上の悩みや問題点、さらには意識していなかった問題点までも含めて指導してくれる教官がいて、その人達が 2 年間付き合ってくれることにあると考えるのである。

### (3) 指導技術改善のための学識の拡大

次に、先に示した本学の先輩のような感想が何故でてくるのかという点について考察してみよう。端的に言って、学校現場で日常起こる諸問題についての具体的解決のための処方箋を、大学院での授業に求めたからに他ならないのではないかと推察する。現職教員が本学に入学する動機としてこのような動機をもっていることは、修士論文のテーマが現職教員の研修についてだとか、授業改善の開発システムであったりして、なんらかの意味で日々の授業実践に結びついている傾向が強いことから言える。一方学部からそのまま入学してきた同級生は、アメリカの教育制度や、青年期の心理的特質など、言ってみればアカデミックな内容になっている。このようなことから、現場教師が日々の教育実践に直接参考になるものを求めていることをうかがい知ることができる。しかし、学校現場に起こる諸問題は極めて多様であり、これに全て対応できるだけの処方箋を大学側が用意できるとみることそれ自体、もはや不可能に近く、また非現実的な見方だといわざるを得ない。さらに、具体的な処方箋を編み出すことこそ、現場にいるわれわれ教師のプロたる所以ともいえる。こうした処方箋をつくるためのさらなる学識を養うこと、そしてそのことを深く自覚することが本学で学ぶ第二の意義であると思うのである。

### (4) 価値観の相対化

第三の意義として、教師の価値観について述べておきたい。教師の日常行為すなわち児童・生徒の学習に対する指導や教材選択並びに教材解釈などは、すべて教師の価値選択的行為である。そして必ずしも自信のないことであっても、即座に判断を下さなければならないことが多い。大学院での研修の究極的な意義は、この一定期間現場を離れたなかで、自分の行為をゆっくりと振り返ることにより自ら疑うことのなかった価値観の変更、あるいは価値観の相対性の自覚を持つことにあると考える。例えば、冒頭で述べたように、いままで自分がよしとして後輩などにアドバイスしてきた指導方法も数々の弱点と限界があり絶対的なものでないこと、自分が暗黙のうちによしてきた授業の質的水準の低さ、さらにはなぜそれでよしとしてきたかの理解である。こうした観点がなく、指導方法のみを追い求めることは、自己の指導法の長所や短所に気づくことはできず、従って後輩に対するアドバイスも自信のないものとなるか、独善的なものにならざるを得ないと考えるのである。

### (5) 教師の文化の相対化

最後に上にのべた価値観の相対化の意義と深く関わることであるが、全国の各地域から集まってきた現職教師と時間をかけて話し合えることである。教師は、自分の勤務する学校・地域での教員文化を身につけなければ、通常の協調的な勤務はできない。そして多くは、その中で教師としての一生を終えることになり、自分の身につけている教師としての文化（価値や規範）を相対化する機会を持たない。ところが、全国から集まってきた友人とじっくり話すうちに、自分の地域で行われ

ている慣行がかなり特殊なものもあることに気づくのである。このようなことから、本学に求めるものは多種多様であったとしても、そこで各人に確実に生起することは、価値の相対化を含めた自己理解といえる。

### 3. 大学院生活の現状

丁度手許にある、本学大学院院生協議会が1986年1月に実施した生活実態調査の結果の一部を紹介しながら、論述することしよう。最後に示した資料がそれである。まず、研究面について検討する。調査結果では、満足要因として他を圧倒して「自分の時間が持てる」ことがあげられている。不満要因として高いのは、「研究設備が不備」の項目である。研究そのものに対する満足度はかなり高い。次に自由記述になっている大学当局に対する要望についてみてみよう。そのうちの主なものをあげてみることにする。非常に多くの回答者があげているのが、図書館の蔵書・研究資料の少なさである。これが、自由記述の様式で記された要望の大半を占めるといってよい。次にパソコン、ワープロの不備と使用制限のあることをあげている。ある程度数としてまとまる項目の最後は、授業のあり方についての問題である。内容としては、開講講座のこと、講義が多く演習が少ないこと、さらに教官自身の研究態度などをあげている。満足事項としては、大学が夜遅くなくても開放されていることをあげている者もいる。特定講座に共通の要望事項として、附属養護学校設置希望がある。

この調査結果から浮かびあがってくるのは、自分の時間が持てて研究に対してはかなり満足しているものの、本学の設備、特に図書館に対して大きな不満を持っている点である。さきに述べた現職教師が大学院で学ぶことの意義が十分に実現されるためには、なによりも時間的ゆとりが大切であると考えられる。この意味では、本学はその機能をかなり果たしているといえる。ただ新設大学の悲しさか、設備に対する不満が非常に多い。一般に、都道府県の教育センターなどより大学の方が蔵書や研究資料が多いのが普通である。図書館については、我々の期待に大きく反していると言わざるを得ない。

次に、生活面について検討してみよう。生活満足要因としては、「宿舎と大学が近い」「自然環境がよい」をあげている。不満要因としては、大学会館（本学の生活関連施設）に関係したことが多い。生活全般に対する満足度も高いといえるが、約4分の1の回答者は不満を感じている。次に、生活面での自由記述による大学当局に関する要望事項をみてみよう。これは研究面ほど多くはなく、内容項目もあまりまとまっていない。項目としては除雪、バスの運行本数、冷暖房、食堂、寮の設備などがあげられている。こうしてみると生活上の不満要因は、大学設置場所と自然条件によるものが多いことがわかる。

以上のことから、設備、設置場所等に不満があるものの、時間的ゆとりがあり、おおむね自由な気分の中ではほぼ快適な研究生生活を送っているといえよう。

#### 4. おわりに

以上、現職教師の大学院で学ぶことの意義と現状について、筆者の個人的な見解や経験を思いつくままにのべてみた。現在、教師の資質能力の向上が叫ばれ、各都道府県における教育センター等の設置などを含め、着々とその手が打たれている。こうした手段の有効性と限界を見極める上でも、そこで学ぶことの意義を深く考察することが必要ではないかと考えるのである。

最後に、本稿をまとめることにより、筆者の大学院における研修を振り返る機会が与えられたことを感謝したい。おそらく、本学で学んだことの意義を冷静な目でしかも深く実感できるのは、来春教育現場に復帰してからではないかと考える。この時にもう一度、本学で学んだことをかみしめてみたい。

上越教育大学における大学院生の生活実態に関する調査 (昭61・1実施)

N = 210

		調 査 項 目	実 数	%
1 研究に満足	①	自分の時間が持てる	145	69.0
	②	思い通りに研究ができる	45	21.4
	③	教官の指導がよい	49	23.3
	④	研究設備が整っている	22	10.5
	⑤	よい友人がいる	61	29.0
	⑥	その他	3	1.4
2 研究に不満	①	自分の時間が持てない	12	5.7
	②	思い通りの研究がさせてもらえぬ	17	8.0
	③	教官の指導が悪い	23	11.0
	④	研究設備が不備	110	52.4
	⑤	人間関係がうまくいかない	6	2.9
	⑥	その他	21	10.0
3		研究面での大学当局への要望	省	略
4 研究満足度	①	十分満足している	22	10.5
	②	まあまあ満足している	130	62.0
	③	やや不満である	37	17.6
	④	非常に不満である	10	4.8
	①	宿舎と大学が近い	104	49.5

5 生活に満足	②	宿舎が住みやすい	13	6.2
	③	自然環境がよい	59	28.1
	④	生活費がかからない	41	19.5
	⑤	その他	12	5.7
6 生活に不満	①	学生宿舎に入れない	19	9.0
	②	宿舎が住みにくい	27	12.9
	③	スーパーマーケットが遠い	64	30.5
	④	学生会館の営業時間が短い	55	26.2
	⑤	食堂のメニューに変化がない	94	44.8
	⑥	その他	33	15.7
7		生活面での大学当局への要望	省	略
8 生活満足度	①	十分満足している	9	4.3
	②	まあまあ満足している	118	56.2
	③	やや不満である	53	25.2
	④	非常に不満である	11	5.2

(注) 本表は、上越教育大学大学院院生協議会で行った調査結果をもとにして作成したものである。

#### 参考文献

- ①西 穰司 「教師の職能発達環境としての大学の位置と役割—現職教師の教育系大学院修士課程における履修を中心にして—」 『上越教育大学研究紀要』 第5巻 第1分冊 1986.
- ②日本教育学会教師教育に関する研究委員会編 『教師教育の課題』 明治図書 1983
- ③牧 昌見編著 『教員研修の総合的研究』 ぎょうせい, 1982
- ④斎藤 泰雄 「アメリカにおける教師の現職教育制度の発展過程—教職の専門職化過程との関連において—」 『東北大学教育学部・教育行政学・学校管理・教育内容研究室研究集録』 第6号, 1975
- ⑤斎藤 泰雄 「アメリカの大学院における教師の現職教育」 『東北大学教育学部・教育行政学・学校管理・教育内容研究室研究集録』 第7号, 1976
- ⑥熊本日日新聞 朝刊, 1985, 5, 26, 1985 6, 2, 田村実と喜読喜市の教員養成等における対談。